The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	保健師のMSM対応能力向上のための研修プログラム策定とその効果に関する研究
Author(s)	和木, 明日香
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61574
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　和木明日香　）	
論文題名	保健師のMSM対応能力向上のための研修プログラム策定とその効果に関する研究

論文内容の要旨

日本のHIV陽性者の約6割は男性同性愛者（MSM;Men who have sex with men）である。保健所でHIV抗体検査が実施されており、主に保健師が対応をしている。HIV抗体検査相談はMSMのHIV感染リスク行動の振り返りを行う場として重要である。本研究は保健師のMSM対応能力向上のために、保健師のMSMに対する理解や認識、対応の現状を明らかにし、その知見を踏まえて研修プログラムを策定し、効果検証を行うことを目的とした研究である。

（調査研究1）近畿圏保健師を対象として、HIV検査相談の現状やMSMに対する認識を明らかにすることを目的とし、構造化無記名自記式質問票を用いて質問紙調査を実施した。対象者は近畿圏2府4県および域内保健所設置市に常勤の全保健師1,951名であった。結果1,535件（有効回答率78.7%）の有効回答があった。

分析の結果、全保健師の87.4%が性相談経験があった。また、52.8%の保健師が、HIV業務に対して苦手意識を持っていた。苦手意識と各変数のクロス集計の結果、経験年数が少ない、同性愛に関する知識点が低い、抵抗感が高いなどが苦手意識に強く関係していた。（p<.001）セクシュアリティに関して養成機関で教育を受けた者の割合は、12.1%と低かった。

（調査研究２）調査研究1の知見を踏まえ、日本・海外のHIV関連の文献調査と、日本のHIV関連の専門家への聞き取り調査を踏まえ研修プログラムを立案・策定することを目的とした。

国内外のHIV研修の実施状況に関する文献調査や日本のHIVの専門家、先行的に研修を行っているNPO団体に聞き取り調査を行い、研修内容や方法、研究デザインについて検討した。その後調査研究１の知見と総合し、本研究の知見を踏まえて研修プログラムを策定した。保健師にとってMSMが身近な存在でないため、存在を可視化することやMSMの健康問題の理解促進、HIV陽性告知支援の理解を目的とした1日研修を策定した。模擬研修を実施し、対象の反応や内容・時間配分を検討した。

（調査研究３）調査研究2で策定した研修を、近畿圏2府4件（大阪・兵庫・和歌山・奈良・京都・滋賀）にて、各県の感染症課の協力を得て合計8回実施した。延べ134名の保健師の参加が得られた。その効果検証を目的として研修前・研修後、1か月後、3か月後の4回の質問紙調査を実施。研修参加者104名を介入群、研修非参加者144名を非介入群とした。質問紙の内容は、ホモフォビア尺度（JIPH）、MSMの対応の自信度、MSMの可視化であった。研修実施による同性愛に対する抵抗感の軽減とその持続が認められた。ＭＳＭへの対応自信度は、研修の効果は無かったが、介入群の研修後に自信度が有意に向上した。研修を経て、実務で経験を積む中で、自信を向上させたと考えられる。

可視化の度合いは、介入群では研修後から、有意に可視化の割合が増加し、3か月後まで維持している。研修により身近にMSMの存在を視認することができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　和　木　明　日　香　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	神 出　計
	副 査　教 授	岡 本 玲 子
	副 査　教 授	小 西 か お る

論文審査の結果の要旨

日本のHIV陽性者の約6割は男性同性愛者（MSM;Men who have sex with men）である。保健所でHIV抗体検査が実施されており、主に保健師が対応をしている。HIV抗体検査相談はMSMのHIV感染リスク行動の振り返りを行う場として重要である。本研究は保健師のMSM対応能力向上のために、保健師のMSMに対する理解や認識、対応の現状を明らかにし、その知見を踏まえて研修プログラムを策定し、効果検証を行うことを目的とした研究である。

（調査研究1）近畿圏保健師を対象として、HIV検査相談の現状やMSMに対する認識を明らかにすることを目的とし、構造化無記名自記式質問票を用いて質問紙調査を実施した。対象者は近畿圏2府4県および域内保健所設置市に常勤の全保健師1,951名であった。結果1,535件（有効回答率78.7%）の有効回答があった。

分析の結果、全保健師の87.4%が性相談経験があった。また、52.8%の保健師が、HIV業務に対して苦手意識を持っていた。苦手意識と各変数のクロス集計の結果、経験年数が少ない、同性愛に関する知識点が低い、抵抗感が高いなどが苦手意識に強く関係していた。（p<.001）セクシュアリティに関して養成機関で教育を受けた者の割合は、12.1%と低かった。

（調査研究２）調査研究1の知見を踏まえ、日本・海外のHIV関連の文献調査と、日本のHIV関連の専門家への聞き取り調査を踏まえ研修プログラムを立案・策定することを目的とした。

国内外のHIV研修の実施状況に関する文献調査や日本のHIVの専門家、先行的に研修を行っているNPO団体に聞き取り調査を行い、研修内容や方法、研究デザインについて検討した。その後調査研究１の知見と総合し、本研究の知見を踏まえて研修プログラムを策定した。保健師にとってMSMが身近な存在でないため、存在を可視化することやMSMの健康問題の理解促進、HIV陽性告知支援の理解を目的とした1日研修を策定した。模擬研修を実施し、対象の反応や内容・時間配分を検討した。

（調査研究３）調査研究2で策定した研修を、近畿圏2府4件（大阪・兵庫・和歌山・奈良・京都・滋賀）にて、各県の感染症課の協力を得て合計8回実施した。延べ134名の保健師の参加が得られた。その効果検証を目的として研修前・研修後、1か月後、3か月後の4回の質問紙調査を実施。研修参加者104名を介入群、研修非参加者144名を非介入群とした。質問紙の内容は、ホモフォビア尺度（JIPH）、MSMの対応の自信度、MSMの可視化であった。研修実施による同性愛に対する抵抗感の軽減とその持続が認められた。MSMへの対応自信度は、研修の効果は無かったが、介入群の研修後に自信度が有意に向上した。研修を経て、実務で経験を積む中で、自信を向上させたと考えられる。

可視化の度合いは、介入群では研修後から、有意に可視化の割合が増加し、3か月後まで維持している。研修により身近にMSMの存在を視認することができた。

本研究はMSMの理解促進がテーマであった。今後HIVの疫学的構造の変化によって異性間性的接触の男性や女性の感染が増加する可能性がある。MSM以外のHIV予防対策にも資すると考えられる。また、看護教育の中でのセクシュアリティ教育の在り方の検討材料となりうる。本研究で得られた保健師の性に関する意識や業務の現状、保健師の同性愛に対する認識、研修の効果検証は、日本国内で先行研究が存在しない。今後の基礎資料となりうる。

現在では非常にマイノリテイと思われている男性同性愛者であるが、本研究の結果より決して少なくないことが明らかとなったため、特にHIV感染の予防や感染者への対応を充実させることが望まれている。それらの保健活動の中心は保健師が担うことが多く、本研究で保健師のMSMに対する認識やHIV業務に対する意識を確認した上で効果のある研修プログラムが開発された意義は非常に大きい。今後ますます我が国では個々人の多様性を受け入れる社会が望まれている。現在、同性婚はわが国では法的に認められてはいないが、海外では合法の国も増えていることから我が国でもいずれ認められると思われる。このような状況を考えるとHIV感染を予防する、感染者に適切な対応をする場面が増えて行くことは間違いないため正しい知識を持ち行動のできる保健師教育が必須となろう。本研究はその状況の礎となる大事なものであり保健学博士学位授与に値すると判断する。